

商業高校における人間関係についてのインタビュー分析：卒業後をみすえた生きづらさに着目して

遠藤, 野ゆり / ENDO, Noyuri

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン

(巻 / Volume)

11

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

49

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

2014-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009640>

商業高校における人間関係についての インタビュー分析

—卒業後をみすえた生きづらさに着目して—

法政大学キャリアデザイン学部准教授 遠藤 野ゆり

1 本稿の課題と方法

(1) いじめの動向

子どもの人間関係、とりわけいじめは、長く学校教育上の中心的問題の一部を成してきたが、平成 22 年の大津いじめ事件を契機に、その議論には一層拍車がかかっている。とはいえこうした議論の中心は、小中学校におけるいじめにあるといえるだろう。実際、文部科学省が平成 24 年に実施した「いじめの問題に関する児童生徒の実態把握並びに教育委員会及び学校の取組状況に係る緊急調査」¹⁾によると、いじめ認知件数総計 144,054 件のうち、高等学校でのいじめは 12,574 件であり、全体の約 8.7% を占めるに過ぎない。また、同調査によると、いじめの問題に対する校内研修を実施していない学校の割合が、小学校では 8.0%、中学校では 9.7% なのに対し、高校では 30.0% と、群を抜いて高い²⁾。これらの調査結果からは、高校におけるいじめ問題は、発生率が比較的低く、学校も取り組みの必要性を比較的感じていない状況にあることが窺える。

高校においていじめ発生率が低下することは、過去においてもいくつかの報告が上がっている。心理学者の詫摩（詫摩 1995）は、いじめは小学校と中学校で多く、高校ではその数はかなり減少することを報告している。森田らもまた、いじめ被害者の割合について、「学年が進むにつれて直線的に低下する傾向が明確に現われている」（森

田他 1999, p.23）、と指摘している。さらに 2003 年には、教育学者の平松による岡山県内の調査でも、同様の結果が出ている。すなわち、いじめられた経験のある大学生がいじめを受けた時期は、小学校が 52%、中学校が 36% なのに対し、高校では 10%、大学では 2% と大幅に減少していく（cf. 平松 2005, p.38）。こうした調査結果からは、過去 20 年にわたって、学校段階が上がるにつれていじめが減少していくという傾向が続いていることが窺える。

(2) 現代の若者の人間関係のあり方をめぐる議論

いじめの問題を含む若者の人間関係のあり方は、学術的にも多くの議論がなされている。なかでも、長いあいだ支配的であった、教育学者の森田によるいじめの「四層構造」、すなわち、いじめの被害者、いじめの加害者、いじめをはやし立てる観客層、ただ傍観しているだけの無関心層という四層からなるいじめの構造論（森田他 1994）に、近年、新たな観点が加えられるようになっていく。例えば教育評論家の森口は、「スクールカースト」（後述）や「優しい関係」（後述）といった問題を整理し、現代のいじめを、「加害者がクラスの大半を占めるいじめ」、「さまざまな差別に基づくいじめ」、「グループ内でのいじめ」、「クラスを超えたいじめ」の四つに分類している（森口 2007）。

森口が言及している「スクールカースト」とは、教育学者の鈴木がメディア等で広まっていたのを取りあげた概念である。鈴木によれば、現代の学級では生徒は小グループに分断されており、それぞれのグループが「スクールカースト」によって明確に序列化されている、という（鈴木 2012）。

また「優しい関係」とは、教育学者の土井が提唱した概念である。土井は、若者のコミュニケーションや人間関係のあり方を次のように解釈している。現代の若者は、「互いの反感が露呈してしまわないように、対立の要素を徹底的に排除しようとし、さらに高度な気遣いをとめた人間関係を営んで」（土井 2008, pp.9-10）いる。土井はこのような「対立の回避を最優先にする若者たちの人間関係」を「優しい関係」と呼ぶ（土井 2008, p.8）が、対立の回避をいくら最優先にしても、人間同士である以上、そこに何らかの対立が存在することはままある。すると、「積極的に対立点をばかすために、互いの関心の焦点を関係それ自体から逸らしてしまう必要が生まれ」る（土井 2008, p.18）。このテクニックとして用いられるのが、いじめという行為である。「いじめという行為は、その加害者と被害者のあいだに生じる対立点に目を向かわせることで、『優しい関係』を営んでいる人びとに孕まれた対立点をかくすという役割を果たして」おり、「互いの反発心を抑圧することで内面に押し込まれていた感情のエネルギーも、あるグループ内でいじめが行われている様子を安全な外野席から眺めることで、多少なりとも解放されることになる」（土井 2008, p.26）のである。

これらの若者論が、その一部を否定したり再解釈したりしながらも、解釈の土台としているのは、1990年代に社会学者の宮台によって提唱された「島宇宙」論である。土井は次のように述べる。現代の学校が、「社会学者の宮台真司が島宇宙と呼ぶように…、それぞれのグループが相互の交通手段を欠いて孤立したまま、クラスという大海に離れ小島のごとく点在している」（土井 2008, pp.23-24）という形で「人間関係が狭くなってい

るのは、…『優しい関係』の重圧が高まってきた結果、クラスの内部においてすら人間関係の相互交流が難しくなって、ごく狭い範囲での関係の固定化が進んでいるからである」（土井 2008, p.24）。すなわち、島宇宙と比喻される学級状況が、いじめを含む現代の若者の人間関係の典型であり、その問題の由来でもあるというのだ。そこで、宮台の島宇宙論を次に確認しておこう。

宮台は、オタクや新人類といった 1980年代における人々の類型化論を分析しつつ、90年代の若者について、次のように述べている。「若者のコミュニケーションは現在、各種の等価な『島宇宙』によって分断され尽くして」おり、「学校の教室のなかも、かつては教室単位の一体感があったり、女の子でいえばキーパーソンを中心に二大勢力にわかれて対立したりしていたのが、現在では二～四人ぐらいの小グループに分断されて」いる（宮台 1994, p.246）。このような小グループを「島」と、さらにそれぞれの小グループが没交渉状態にある空間を「島宇宙」とみたてる宮台によれば、「『島宇宙』相互の間にはおどろくほどの無関心しかなく、せいぜい残存するのは、同一の「島宇宙」内部での『…階級闘争』（ナンバーワンはオレだ！）だけである」（宮台 1994, p.247）。すなわち、同級生としての一体感などなく、各小グループにわかれ、それぞれ没交渉で無関心な状態にあるのが、現代の学級内の人間関係の特徴だ、というのである。

以上の見方からすると、枝葉に異論はあるとしても、現代の若者は、基本的に小グループを形成し、相互に没交渉でありながらも、グループ内部での人間関係に細やかな気遣いを見せるがゆえに、ときにいじめ関係を生きざるを得ない、と整理できることになる。しかも 1（1）のいじめ発生率の調査からも明らかになるように、彼らの人間関係がいじめへともつれてしまうことは、学校段階が上がるにつれて減少するのであり、若者は次第に、その狭い人間関係においても、問題を少なくとも表面化させることなく人間関係を過ごせるようになっていく傾向がある、といえることになる。

(3) 本研究の課題と解明方法

こうした事態は、1990年代に中高生活を体験した筆者自身の実感とも一致している。さらには、筆者が勤務先の大学にて、2000年代に中高生活を送ってきた学生たちから聞く話ともおおむね一致している。大学生たちのほとんどは、当事者であったかどうかのいかに問わず、いじめは周囲で起きていたと語り、さらに、小学校、中学校でのいじめは多いが、高校以降でいじめは周囲でもほとんど発生していなかった、という点でも多くの者の話が一致している。学校段階が上がるにつれていじめが減少する理由として、「高校生にもなればある程度おとなになり周囲との適切な付き合い方ができるようになる」といった発達上の問題に加え、「進学校なので勉強に忙しく、周囲に無関心になりがちだった」という進学上の問題とする意見が多く出される。後者は、スクールカーストの議論にあるように、それぞれのグループが序列化されているとしても、基本的にグループ間では没交渉になる、という若者論と一致する姿といえる。

こうした意見が妥当ならば、高校でのいじめ発生率は中学でのそれに比べて低いとしても、非進学校では、進学校よりも多くのいじめが発生しやすい、ということが推測されることになる。非進学校と進学校でのいじめ発生率を比較しえる調査とその結果を、筆者は管見にして知らないが、この推測を裏づけるように、商業科高校出身のある大学生からは、「高校時代の人間関係はとてもドロドロしていた」という話を聞いたことがある。一方で、小グループ化してそれぞれのグループ間では没交渉であり、極度に気を遣い合うといった、先行研究の描きだす若者のコミュニケーションのあり方からすると、「ドロドロしていた」という表現は、なにかそぐわない印象も受ける。

そこで本稿で考えたいのは、非進学校での人間関係には、進学校の高校における人間関係とは質の異なるものがあるのだろうか、もしもあるならばそれはどのような理由によるのだろうか、という点である。宮台や土井の議論が、現代社会の大

まかな傾向を捉えるものであるがゆえに数多くの例外が含まれるのは当然のことだとして、その例外を分析することで、時にははじめにもつながりうる人間関係の息苦しさには、まだ一考すべき要因が他にあることを明らかにしたい。

そのために筆者は、商業科高校出身の三名の女性（竹下さん、石川さん、高野さん、仮名、以下同様）に、2013年12月に集団インタビューを行った。竹下さんは推薦で全国区の私立中堅大学に、石川さんは地元の四年制女子大学に進学しており、高野さんは高校卒業後に社会人として地元で働いている。インタビュー実施時期には、三人がA県B市にあるC商業高校³⁾の同じクラスを卒業してから四年が経っている。インタビューは筆者（Q1）と研究協力者（Q2）の二名で、竹下さんと筆者は面識がある。三人には、「商業高校での人間関係」というテーマで自由に語ってもらった。三人の許可をとってインタビューは録音し、その音声データをもとに逐語録を作成した。

本稿では、このインタビュー内容を分析し、先行研究で明らかになっている若者の人間関係とは異なる姿を洗い出し、その新たな姿を解釈する視点を探っていくことにする。

2 商業科高校における人間関係

(1) いじめを含めた学級内での人間関係のもつれ

まず、C商業高校におけるいじめや人間関係の状況についての三人の話に簡単に触れたい。三人から繰り返し出された話によると、学級内での人間関係は、頻繁にもめたという。その要因について、一つには、いじめっ子の存在があり、もう一つに、体育系の部活（D部）所属のグループの存在があったという。

【インタビュー①】

竹下さん：石川さん⁴⁾は、入学してすぐ、[略] 仲良くなったグループが面倒くさくて、もめたという。

石川さん：ありました。一人なんですけど、一人の子ともめて、もめてというか。

竹下さん：むっちゃケンカしてたもんね。

〔略〕

高野さん：その子は小学校、私一緒に、その子に小学校の時いじめられて。同じ高校になったんで、そうなんですよ。

石川さん：だから高野さん入学して最初、すごいビビりまくって、その子にいじめられてたんだよね。すごい相談されたよね、私ね。

高野さん：もう、いやだと思って。

〔略〕

竹下さん：石川さんから、〔略〕こんな一件があったの本当に最初の2、3ヶ月だから、もうそのあとから名前でも聞いたことないの。「あいつ」とか。

Q 1：固有名詞で呼びたくないんだ？

石川さん：もう、封印してるから。

竹下さん：間違って石川さんの前で名前呼ばうものなら、「ええ、その話止めてもらっていい」みたいな。がち、怖い。

石川さん：本当にいやなの。

Q 1：何があったの？

石川さん：最初に仲良くなって高校生だったし、初めて友だちできたから、私も全然、友だち、高校かぶってる人とかもいなかったんで不安とかあって、最初に友だちできたから普通に席も近かったし話してたんですけど、ふと考えて、彼氏がいて、向こうに。中学校の時にネームみたいのがあったんですよ、それを着けたみたいな感じで、そういうのを着ける、彼氏のを着けるのが流行ってて、みんなやってるんですよ。で、私も〔彼氏が〕できて、それを着けてて、そしたらそれを「真似した」みたいな感じに言われて、別に真似したって、別に私〔ネームを〕取っても全然いいから、「別にいいよ、私取るし」みたいな、「別に真似

したとかじゃないから」みたいな感じに言ったら、そこから虚言癖がすごい始まって。虚言癖っていうか、私が使ってた鏡を他の子が使ってて、同じのを使ってて、それを〔略〕「石川さん真似したんだよ」みたいな感じで言われて、「いや、たまたま一緒だっただけでしょう」みたいな。〔略〕そうしたら他の子もそういうことが多々あって、ああ、そういう子だったんだと思って。

【インタビュー②】

Q 1：〔D部の部員の〕一部が暴走するわけ？

竹下さん：いや、五人の中の三人かな。あっ、でも、二人か。〔略〕三人か。

石川さん：うん。

〔略〕

Q 1：最初、やっぱD部はD部で固まっているの？それ最後まで？

竹下さん：最後まで。

高野さん：もう中学から知り合いみたいです。

竹下さん：練習試合だったりとかね。

Q 1：派手な感じなの？D部の子たちって？

高野さん：そうですね。

石川さん：目立つっていうか、うるさい。

〔略〕

竹下さん：声がでかいよね。〔略〕見てもらいたい感がすごくて。目立ちたいが一番。

三人によると、当該の「いじめっ子」は、三年間学級内のあちこちのグループでもめごとを起こしていた、という。また、クラス内の7分の1を占めるD部在籍者のグループが、さまざまな問題を引き起こしていたという。

こうした事態が、商業科高校の典型例なのか、それともたまたまC商業高校で生じたことなのかは明らかでないが、各グループ同士の没交渉が現代の若者の学級内での人間関係の特徴とするならば、その特徴とは異なる形で学級内の人間関係

が成立していたといえる。

このことは、さらに次の発言によって裏付けられる。三十五名の女子生徒の人間関係を図式化してほしい、という筆者の要望に対し、「初期の方がいいですかね」（高野さん）と言いながら、三人はあっという間にグループの数や構成メンバーを書いた。そのグループは、三年間でかなり変化したという。

【インタビュー③】

Q1：じゃあそうやって、グループはやっぱり、かなり三年間で変わるんだね。

竹下さん：変わって、三年が一番落ち着いてたかなやっぱり。

〔略〕

竹下さん：なんかみんなもう、こいつねえな〔と思う相手〕ともやっていく必要がないと思うから、ある程度いやってはっきり言うようになってたかな、というのはある。

ここには、先に述べたように、互いの反感をさせないために高度な気遣いをともなった優しい関係を営む現代の若者は、「親密な人間関係が成立する範囲を狭め」られ、「他の人間関係への乗り換えも困難」（土井 2008, p.17）である、という土井が現代の若者の人間関係として描く姿とも異なる姿がある。

(2) 人間関係の濃密さ

こうした状況が生まれる背景には、長期間にわたる濃密な人間関係がある、と考えられる。C 商業高校では、「〔商業〕科で入学したら三年間そのまま一本のクラスで卒業するみたいなシステムで、三十九人1クラスが三年間一緒にいたいな、クラス替え一回もないみたいなクラスで生活して」（竹下さん）いたという。そのなかで、決して親しいわけではないにもかかわらず、お互いについて非常に細かい事柄まで知り尽くしていることが、三人の語りからはわかる。例えば次のような

語りがある。

【インタビュー④】

高野さん：〔E ちゃん〕すごい恵まれた家系なのに、なんでそんなに淋しがり屋なのかが不思議で。

竹下さん：親、先生なんだっけ？

高野さん：先生。中学校の教師で、体育の教師なんですけど、バレーを教えている先生なんで、だから娘の E ちゃんもバレーやっているんですけど。

竹下さん：お兄ちゃんいるんだよね。

高野さん：お兄ちゃんいて、お兄ちゃんお笑い芸人目指して、まだ 26 で、いるんだけど家に。

【インタビュー⑤】

竹下さん：〔F ちゃん〕キャバ嬢になっちゃった。それで変な男に引かれたんだよね、確か。違ったっけ？

高野さん：そうそう。あの、刑務所に入るようなヤクザみたいな。

インタビュー④と⑤からは、同級生の家族背景や恋愛事情にまで、それぞれが精通していることが窺える。しかもこの E さんも F さんも、三人にとって、決して親しい同級生ではないという。

3 卒業後の人間関係

(1) 卒業後も続くつながりの濃密さ

三人の語りからさらに窺えるのは、そうした濃密な人間関係が、卒業後も続いているということである。例えば、インタビュー④や⑤には、在学時の同級生の事情であるだけでなく、卒業後の同級生の情報も含まれている。

こうした情報把握が可能な理由は、卒業後も頻繁に顔を合わせるがゆえであろう。実際、高野さんは、ある同級生の名前を指さしながら、「ここからディズニーランド行こうって誘われて、急

に来て」と語る。

【インタビュー⑥】

高野さん：「向こうが」自分から連絡を取る。

Q 1：ああ、もうガンガンいくんだ。

高野さん：ガンガンもう行くんです。いろんな子に、今何してる？、遊ぼうって。

竹下さん：来る、来る。めっちゃきてたよ、最初。

卒業後にも人間関係が濃密なことそれ自体は、普通に考えれば、望ましいことかもしれない。しかし、当事者たちはその人間関係に息苦しさを感じている、という。

【インタビュー⑦】

竹下さん：「Eちゃんの誕生日会をどうするかで」いまだに面倒くせえのか。成長しねえなあ。

高野さん：そう、成長ないんですよ、もう。

竹下さん：もうババアだぞ、二十二って。

Q 2：そうだよな。ずっとそんな関係が続いてるの？ 四年間。

高野さん：続いてるんですよ。〔略〕お祝いをしてあげないといけなくて。〔略〕

高野さん：でも、周りの子は祝うの。Gちゃんもそうだけど、Hちゃんも絶対旅行に〔行く〕。

竹下さん：なんで行くの？

高野さん：Gちゃんも、もう疲れていやだって言ってる。

石川さん：ブチれば〔＝無視すれば〕いいじゃん。

〔略〕

高野さん：そう、ブチることができないんですよ、でも。

Q 2：なんで、なんで？

竹下さん：あれでしょう。病み始めるからでしょう向こうが。「ええ、私なんかどうせ一人なんだ」とか言って。

高野さんがGさんの言葉から間接的に語っているように、卒業後のこうしたつきあいは、当事者にとっても「疲れていや」なものである。にもかかわらず、彼女たちにとってそれは、無視することのできないものでもある。このように働く力学を、本人たちは、「ええ、私なんかどうせ一人なんだ」と言いだすEさんの「病」でもって説明している。しかしながら、語られる人間関係の濃密さからは、さらなる理由があるように見うけられる。それは、卒業してからこれまでの人間関係だけではなく、今後の人間関係を見据えて生きざるをえないという、三人の状況にある。

(2) 今後が続くつながり

卒業後の人間関係が濃密なまま続くといっても、その内容が不変なわけではない。例えば同窓会については、次のように語られる。

【インタビュー⑧】

Q 2：同総会って、しょっちゅうあるの？

高野さん：いや。最近なくなりました。

〔略〕

高野さん：一気に結婚していった子が増えたので。

竹下さん：そうだよな。結婚したよね、みんな。

結婚を機に人間関係に大きな変容がもたらされるのは、学校種を問わずであろう。また、卒業後時間が経つにつれ、同窓会等の付き合いが減っていくことも、自然なことと考えられる。

しかしながら、この結婚にも、同級生同士の濃密な人間関係が大きく影響していることが、次の語りからはうかがえる。

【インタビュー⑨】

竹下さん：なんかJちゃんとKちゃんは、〔人のことを〕すげえ気にするタイプだったよね。

高野さん：人の視線をね。そう。だから事実、22日Jちゃんは結婚するんですけど、そ

の式呼ばれたのLちゃんとEちゃんなんです。Eちゃんとは大して仲良くなくて、Eちゃんも何で自分が式呼ばれたのかが分からないって言うてるほどなんで、式だけね。

竹下さん：でもまあ、Eちゃんだけだよ。

〔略〕面倒くさそうな呼んどかなきゃやばいもんね。

高野さん：そう。だから多分Jちゃんはそういうの敏感に考えるタイプ、のちのちのことを。

〔略〕

Q1：のちのちのことを考えるっていうことは、今後も何かで付き合っていくねって、みんなどこかで思っているっていうこと？

竹下さん：もしかしたらこのB市内で子育てをしたときに、自分の子どもとそこの子どもが一緒になるかもしれないって考えてるかもしれない。

〔略〕

高野さん：あとは、お祝いじゃない、どれだけ人がお祝いしてくれるか自分に。

竹下さん：うんうん。そりゃあ気になるだろうね、人の目気にする子は。

高野さん：Eちゃんを入れておけば、Eちゃんはみんなに連絡を取ってくれるって思っているんだよね、多分Jちゃん〔は〕。

結婚式というイベントに対する周囲の視線を気にすることが、C商業高校卒業生だけに特有なことではないだろう。しかし、そうした学生時代の人間関係を引きずった参加者でとり行われる結婚式は、「のちのちのこと」を敏感に考えさせてしまうというのは、例えば大学進学や就職を機に土地を移動することが一つの選択肢として浮かんでくることも珍しくない、進学校とは事情を大きく異にする、と考えられる。

少し古い調査ではあるが、地理学者の河邊によると、高卒の女性が住所を変更するのは、就業時で16.5%（同時機の住所移動、大卒女性、

28.4%）、就業から結婚前における住所移動は13.2%（同時機の住所移動、大卒女性、17.5%）、結婚前から結婚後における住所移動は22.6%（同時機の住所移動、大卒女性、33.0%）、結婚後の住所移動は19.2%（同時機の住所移動、大卒女性、21.8%）となっている（河邊1995, p.7）。すなわち、大卒の女性に比べて高卒の女性は、住所移動をする割合が、人生のどの時機においても、低い傾向にある。「女子では、…高学歴ほど高い移動率となる傾向が認めらる」（河邊1995, p.9）のである。

したがって、就職する者や短大、専門学校に進学する者の多いC商業高校でも、進学校に比べて、生徒たちが人生において住所を移動していく割合は限られる、と推測される。実際、卒業して4年後の現在についても、三人は次のように語る。

【インタビュー⑩】

竹下さん：みんな実家は出てないよね。

高野さん：出てないです。

〔略〕

竹下さん：実家からそのまま結婚する人の方が多いよね。一人暮らししてとかじゃなくて、結婚するって決めて、例えば同棲始めてっていうタイプみたいなほうが多いかな。

Q2：で、あまりB市から出ない感じで、彼氏もそこらに住んでるとかで、そのまま子どもも産んでっていう感じか。

竹下さん：〔出て〕A県内っていう感じ。

結婚を機に人間関係が変化するとしても、住む場所が今後も大きく変わることはないだろう、という予感において、彼女たちは、本当は「疲れていや」なはずの付き合いを、絶つことができずにいる。このことが、彼女たちが現在体験している、人間関係の息苦しさなのではないだろうか。

(3) 地元つながり文化と人間関係の息苦しさ

こうした推測が妥当ならば、彼女たちの人間関係を捉えるうえで必要なのは、教育学者の新谷が提唱する、「地元つながり文化」の視点といえる。新谷は綿密なフィールドワークに基づき、中学卒業後や、いわゆる学校ランクの低い高校を卒業した若者たちが、中学時代の友人や先輩・後輩関係を中心とする集団を形成し、その集団の維持を、進学、就職やそれによる上昇移動、地域移動よりも重視する傾向があることを指摘し、こうした若者の文化を「地元つながり文化」と名づける（新谷 2002）。地元つながり文化のなかにある若者は、その帰属集団を維持し、地元で生きていく将来を展望する。

新谷においては、この文化それ自体は当然のことながら、価値判断の対象とはならない。新谷に限らず、例えばイギリスにおける労働者階級の子どもたちが自ら積極的に反学校文化を選択していくといったウィリスの指摘にもあるように（ウィリス 1996）、学校へのある種の不適応が、当事者によってポジティブに選択されていくことは、疑いようのないことである。にもかかわらず、少なくとも C 商業高校においては、こうした地元つながりが、当事者にとっての息苦しさとつながっている。

なぜ彼女たちにとって、地元つながりは、息苦しさと直結するのだろうか。その点を、自らの母校についての彼女たちの次の語りから考えたい。

【インタビュー⑪】

高野さん：私は、間違えたなこの高校って思いました、この教室いやだと思って。

竹下さん：いやだって、一年生の時、本気で辞めようと思って学校調べてたもんね。バイト先の先輩に相談してたもん。学校、辞めようと思うんですよねって。

高野さん：みんな一瞬は思ったよね。ちょっと学校変えたいなんていう。

竹下さん：辞めればって言われて、やっぱ頑張ろうと思った。一年が一番辛かったな私は。

〔略〕

石川さん：幼稚だったから本当。

竹下さん：レベルが低かったから。

高野さん：女クラ⁵⁾って辛いんだって思いながら。

こうした語りから見えてくるのは、彼女たちにとって母校は、たとえ一方ではウィリスの指摘するようなポジティブな選択を生じさせるとしても、一方で、ネガティブなイメージに彩られている、ということである。しかも先に述べたように、この学校におけるつながりが、在学中のみならず、卒業後も、これからも、「のちのち」までずっと続くであろうという予感のなかで、彼女たちは、入学した当初から学校にネガティブなイメージを抱くことになる。自らがポジティブに選択する前に、今後の人間関係が断ち切りがたい形で示されることによって、彼女たちは、ネガティブにならざるをえないのではないだろうか。

もしもそうであるならば、当事者にとって重要なのは、実際にどのぐらいの割合の卒業生が地域移動や上昇移動することになるのか、という数値的なデータではなく、そうした地元つながり文化のなかに浸り、その雰囲気浸されながら生きている、という感覚の方であろう。そしてこのことは、たとえ実際には新たな人間関係に今後開かれうるといふ論理的可能性がどれほど提示されようとも、彼女たちにとってそれは、有望な選択肢にはならない、ということの意味しているのである。

4 おわりに まとめと今後の課題

本稿では、商業高校における人間関係についての当事者の語りを考察してきた。すると、一般的に人間関係の希薄化する高校段階ではいじめや人間関係のもめごとが減る、もしくは潜在化すると考えられるのに対し、インタビューの母校では、

多くのもめごとを含めた濃密な人間関係が展開されていたことがわかった。さらには、こうした濃密なつながりが、卒業後も続くことだけでなく、きっと今後も続くだろうという予感の充満した地元つながり文化のなかで、心情的にはいやであっても関係を断ち切れずにいる姿が明らかになった。

こうした人間関係のもつれを解き明かすためには、若者の人間関係を没交渉の島宇宙というシステム論から捉えるのも、気を遣い合う優しい関係として捉えるのも、グループ同士の序列化というスクールカースト論から捉えるのでも不十分であり、卒業後の人生が彼らにとってどのようにイメージされているのか、という視点からの分析が今後必要になるであろう。さらにいえば、この視点は、大学の地元化が進んでいる現状からすると、今後、若者の人間関係を広く捉えるうえでの重要な視点ともなりうるはずである。

この視点をより明確にするためには、進学校の若者との比較が重要になる。また何よりも、今回インタビューに応じてくれた三人も含め、C商業高校の学生たちが、言葉のうえでは学校生活に不満を語り、継続するつながりを「疲れていや」と語りながらも同時に、地元や母校への愛着をも示すことを見落としてはならないだろう。いわゆるランクが低い学校へのネガティブな反応が、一面でしかないというところに、地元つながりの複雑さがあるはずである。こうした点の詳細な考察は、筆者の今後の課題としたい。

(付記：本研究のためにインタビューにご協力してくださった三名の女性に、心よりお礼申し上げます。ときに表情を歪めながらも、高校時代について生き生きと語ってくれる姿からは、研究への重要な刺激をいただきました。なお、本研究は、文部科学省科学研究費〔課題番号：23730749〕の助成を受けています。)

——— 注 ———

- 1) http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/11/_icsFiles/afieldfile/2012/12/09/1328532_01_1.pdf p3、2013年1月15日閲覧。
- 2) 同サイト、p.23。
- 3) C商業高校は例年、大学進学率が25%程度、短大進学率が15%程度、専門学校進学率が25%程度、就職率が20%程度の進路状況にある。
- 4) インタビューー三名はお互いをニックネームで呼び合っていたが、本稿では仮名の名字のまま記載する。
- 5) 当該のクラスは構成員のほとんどが女子生徒であるため、「女クラ [= 女子クラス]」と呼ばれていた。

引用文献

- 新谷周平 (2002) 「ストリートダンスからフリーターへ」『教育社会学研究』第71集
- 土井隆義 (2008) 『友だち地獄—空気を読む世代のサバイバル』筑摩書房
- 平松芳樹 (2005) 「現代の子どもといじめについて—の考察—青年期におけるいじめの意識調査」『中国学園紀要』4, pp.37-42.
- 本田由紀 (2012) 『教室内カースト』光文社
- 河邊宏 (1995) 『移動歴から見た日本の国内人口移動』
- 宮台真司 (1994) 『制服少女たちの選択』講談社
- 森口朗 (2007) 『いじめの構造』新潮社
- 森田洋司・清永賢二 (1994) 『いじめ—教室の病い』金子書房
- 森田洋司・滝充・秦政春・星野周弘・若井彌一 (1999) 『日本のいじめ—予防・対応に生かすデータ集』金子書房
- 詫摩武俊 (1995) 『いじめ—のりこえるにはどうするか』サイエンス社
- ポール・E・ウィリス (1996) 熊沢誠訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房

The analyze of an interview about interpersonal relationship in the commercial high school

From the view point of ‘tie’ after graduation

ENDO Noyuri

Recent young people's relationship is often argued from the view point of 'island-universe' which is proposed by a sociologist, Miyadai. According to him, young people belong to some narrow groups and the groups hardly ever communicate each other.

Another argument about young people's relationship is the bullying. It is reported that the more children developed, the less bullying occurs. Besides university students, who are not drawn into the vortex of bullying now, guess that one of the reasons is necessity to concentrate on university entrance examination.

In combination both arguments, it is necessary to investigate the actual conditions of bullying in schools not centered on preparing students to get into university.

This paper analyses an interview about how

the commercial high school students build their interpersonal relationship. We can find in the interview that the interviewees who graduate same commercial high school four years ago, not only had complicated and deep relationship at that time but also still have inseparable relation though they get sick and tired of it. It is a different status from the island-universe. The reason they still have thick relationship is they expect that they will live and get married and bring up their children in same place, same town, and same community.

So this paper makes a conclusion that it is necessary to propose another view point, the culture of close ties in home community in the argument about young people's relationship including bullying.